

当院における小児新型コロナウイルス 感染症入院例の臨床像の検討

つかもと かず き ます かね せい や
束 本 和 紀 舂 金 聖 也
わ だ けい すけ たけ たに たけし
和 田 啓 介 竹 谷 健

キーワード：医療逼迫，基礎疾患，コロナワクチン接種，
新型コロナウイルス感染症，入院リスク

要 旨

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のため入院した15歳以下24例につき後方視的に検討した。4歳以下の低年齢が多く，男児が女児の4倍を占めており，無症状，軽症，中等症および重症はそれぞれ5例，12例，6例，1例であった。第5波（デルタ株流行期）以降で入院例が生じ，その後も波を追うごとに入院患者数が増加したが，基礎疾患の有無に関わらずほとんどの症例で特異的治療が不要であった。感染経路の半数は家庭内感染であった。保健所管轄を越えて当院への入院した小児例があったことから，小児においても島根県全域で深刻な医療逼迫の時期があったことが明らかとなった。また，COVID-19で入院した患者の91.7%はワクチン接種を受けていないか，接種対象外の年齢であったことから，小児に関わる医療従事者には，ワクチンの有効性を小児および保護者へ丁寧に説明していくことが求められる。

はじめに

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は2020年から日本で流行し，Common diseaseの一つとなった。当初「原則全例入院」であったが，第6波（オミクロン株流行期）以降，小児を含む患者数の爆発的増加のため，島根県は2022年1月

中旬に「重症化リスク優先」の入院に方針を変更した¹⁾。さらに2022年9月26日以降，全数届出の見直しにより発生届の対象が大幅に限定され，その他は原則自宅療養となった²⁾。

小児例はオミクロン株流行以降，患者の低年齢化と基礎疾患有病率の上昇が報告され，臨床像もパンデミック初期の無症状・軽症中心から，グループ症候群，熱性けいれんなど治療を要する合併症の増加が報告されるようになった³⁾。一方，小児は成人に比べて，予防対策および特異的治療

Kazuki TSUKAMOTO et al.

島根大学医学部小児科

連絡先：〒693-8501 出雲市塩冶町89-1

島根大学医学部小児科